

令和3年春の褒章「黄綬褒章」を 海洋建設(株) 片山 敬一 が授章

貝殻リサイクル魚礁の発明考案

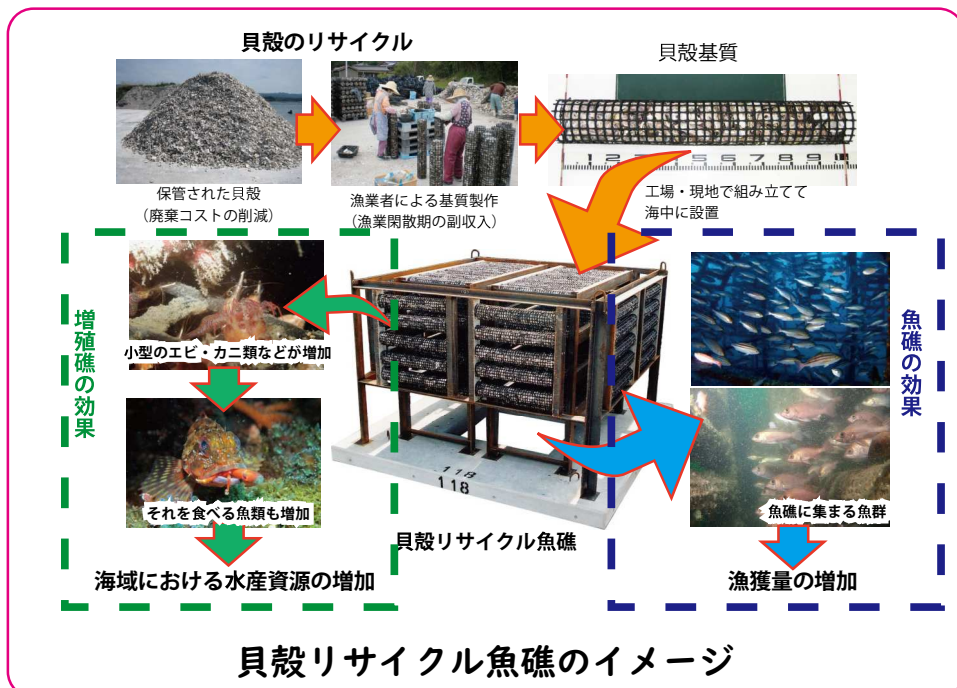
海洋建設(株)の代表取締役会長である片山敬一は、「貝殻リサイクル魚礁の発明考案」による功績が認められ、内閣府より令和3年4月29日に発令された令和3年春の褒章において、黄綬褒章を授章しました。

【功績の概要】

我が国の沿岸地域においては、埋立等の開発により魚介類の生息場が著しく減少し、それに伴い魚類等の水産資源の減少も顕著でありました。また、養殖技術の発展によりカキやホタテなどの貝類養殖が広がっていましたが、その副産物として発生する貝殻の処理も大きな課題となっており、多くの漁業者や漁協などで苦慮されていました。このような社会情勢の中、資源を増やすための高い増殖機能を備えた人工魚礁の開発や貝殻の有効活用技術の開発が強く望まれていました。

これらの問題を克服するため、カキ殻が堆積した場所には多くの餌虫（ゴカイなど）の絶好な漁場となっていることに着目し、貝殻を活用することで水産資源を効率良く増やせる貝殻リサイクル魚礁を発明しました。本発明は、従来のコンクリートや鉄等による人工魚礁に、生物に対して魚礁が持つ機能のうち、特に「餌場」「隠れ場」効果を高めたものであり、国や地方自治体が事業主体となる公共事業で広く使用されています。

本発明により、沿岸域における生物多様性増幅や水産生物の増産に寄与するとともに、製品の製作を通じて漁業者自らが漁場造成に関わることができるようになり、漁業閑散期における雇用創出にも寄与しています。



【受賞者の言葉】

この度、令和3年春の褒章に際しまして、「貝殻リサイクル魚礁の発明考案」により、黄綬褒章拝受の栄を賜りました。

私は、中学校を卒業後、漁師、潜水士として海や魚介類などと密接に係わり、魚介類の生息場、水産資源の減少など沿岸域の変化を目の当たりにしてきました。このような状況を何とかできないかと考えて開発したのが貝殻リサイクル魚礁「JF シェルナース」になります。

本技術の開発は、昭和60年から始まり、多くの方々の協力、指導のもとに実証試験を重ね、平成6年度に岡山県で採用されたのを皮切りに全国に普及させることができました。

今後も日本の海を豊かにするという信念のもと、海域環境の改善や水産業の発展に貢献して参ります。

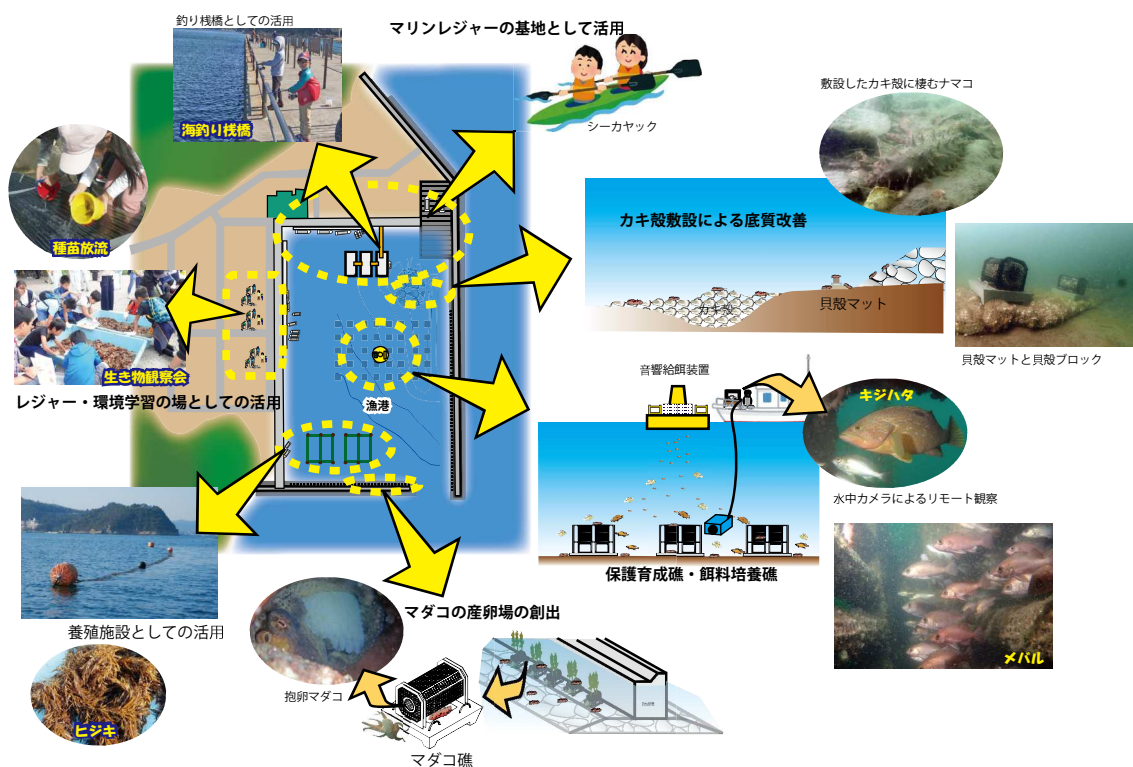


片山 敬一

未来に向けて（今後の展望）

貝殻はカキやホタテの養殖業が続く限り必ず生産される資源であり、海を汚すことのない天然素材です。2015年に国連サミットでSDGs（持続可能な開発目標）が採択され、我が国を含む世界中で持続可能な社会への実現に向けた変革が求められています。水産業の分野においても、持続可能な漁業生産のためには適切な資源管理や資源回復が必須であります。貝殻リサイクル魚礁をはじめとする貝殻技術は、多種多様な生物の生息場を創出し、餌となる動物が増えることで魚介類の増産に寄与するものであり、「豊かな海を守ろう」というSDGsの開発目標14にもよく合致したものであります。今後は、漁港・港湾のビオトープ化や開発が進む洋上風力発電施設への応用など、環境分野における貝殻技術の活用を目指し、技術の開発と普及に積極的に取り組んでいきます。

【漁港のビオトープ化のイメージ】



【洋上風力発電施設への活用イメージ】

